

〈『神学大全』 翻訳完成記念特集〉

『^ス神^ン学^マ大全』 翻訳から学んだこと

稲垣良典

1. 私が『神学大全』の翻訳者の一人に加えられて最初に担当したのは昭和52年に刊行された「法について——旧法について」と題する第13分冊であった。高田三郎先生から直に伺ったところでは、先生はこの翻訳をまず御自分が指導・育成された六人の研究者たちと共に始め、次にこれら六人の研究者たちがそれぞれ数名の研究者を育てて仕事を続行すれば10年か、そこらのうちに翻訳は完了するはずだ、という目論見だったようである。先生はこの話を、「あの鼠算は外れた」と苦笑しながら結ばれたのだが、そのような計算外れがなかったら私に『神学大全』翻訳の機会は訪れなかったかもしれない。

昭和35年に刊行された第1分冊の『『神学大全』邦訳序文』に「この著の訳出の企ては遠く十数年以前に遡る」と記されているのは、京都大学文学部に中世哲学講座が創設され、高田先生がその初代担当教授として着任されるのに先立って古代中世哲学史を講義しておられた山内得立教授の『^ス神^ン学^マ大全』演習を指している。当時から当番の学生は後で担当分を清書して提出し、それらを集めて翻訳を出版する計画が立てられていたようである。この時期のいわば『^ス神^ン学^マ大全』翻訳前史、および京都に中世哲学研究センターを設立することを目指して「聖トマス学院」を創設したドミニコ会のV. M. プリオット神父の支援を得て、高田先生を中心に開始された本格的な翻訳作業の初期の段階については、山田晶先生の『世界の名著・続5トマス・アクィナス・神学大全』の解説と、大鹿一正先生が『創文』(356号、1994・7月)に寄稿された「追悼 高田三郎先生」を参照していただきたい。因みに文部省の学術図書刊行費

補助金を得て刊行された第 1 分冊の初版は 500 部であった。

2. 高田先生が私に翻訳の仕事を手伝うよう声をかけられたのは、『神学大全』第 1 部の訳が昭和 48 年に完了した後、山田先生は御自分の研究に専念するために翻訳分担から離れ、すでに第 3 部まで分担を割当てられていた他の翻訳者たちの仕事も滞りがちだった頃であった。私は当時、プリオット神父が停年で退いた後を受けて、京都大学文学部非常勤講師として中世倫理思想の講義を担当していたので、『神学大全』の翻訳者グループに加わることは自然な成り行きだった、と言えるかもしれない。他方、翻訳分担の割当ては全部きまっていると聞いていたので、前述した分冊の出版をもって私の仕事は終了だろうと考えていた。ところが第 2 部 16 分冊のうち 10 冊（そのうち 1 冊は片山寛教授と共訳）を担当し、山田先生が独自の構想で全訳される筈であった第 3 部も最初の 4 分冊を除く他の 17 分冊を担当する結果になったのはすべて事の成り行きに従ったのみである。

創文社創立の直後に高田先生から持ち込まれた「スンマ全訳の出版」を二つ返事で承諾した久保井理津男さんは、平成 23 年 11 月、私が翻訳完了を報告したところ、折返し頂いた手紙で「お願い（い）して来たスンマの全訳がやっと出来上るのだ（と）私の出版人のたましいがこうふんして二日も寝れない夜が続きました」と記した後で「先生自身がおやりになりたい研究もあったことと思います。難しい、しかも滅多に無いこの様なボリュームの訳業の大半をお任せしてしまった責任を感じます」と^{ねぎら}労いの言葉をかけて下さった。この御言葉は有難かったが、ここ何十年か日課として続けてきた「スンマの訳」が私の「やりたい研究」の妨げになると感じたことは一度もなかった。むしろこの日課が私の生活に秩序と安らぎを齎してくれたことを感謝している。

3. 私はこの翻訳の仕事に関わったことから数多くのことを学んだ。その最大のものは訳書の「まえがき」で繰返し記したように、「《神学者》トマスの明晰、冷静で、《非個人的》とまで評される学者的な語り方をつきぬけて、われらの救いのために人となられた神という受肉の神秘にたいして何よりも自らを全面的に開こうとする《キリスト信者》、そし

てこの信仰の理解が進むにつれて燃えあがる神への愛に自らを献げ尽そうとする《修道者》トマススレンマの声が響いてくるような経験であった。ところで、西田幾太郎博士は「トマスの書いたものは、実に全体がよく調って明晰なものの様である。……トマスの思想というものは、実に明晰な、全体がよく調った、大きな美しい體系の様である。何となくラファエルの畫の如くにも思われるのである。併し私は何だか心の底から動かされると云う様に思われぬ。非常な深さとか高さとか云うものがない様である」(『続思索と體驗・以後』全集第12巻, 204-205頁)と評しておられるが、これは『神学大全』^{スレンマ}をそこに含まれている2669個の問いと同じ数の「解答」の集積として読むかぎり、おそらく誰もが抱く印象であろう。そして、トマス研究は彼が明晰な言葉で提示した諸々の解答を正確かつ批判的に理解することに徹すべきであって、それを超越してトマスが「キリスト信者」「修道者」として打込んだ探究について語ることは、それこそ「語りえないこと」について敢て語ろうとする試みにすぎないのではないか、と考える人が多いかもしれない。この問題についての私の考えは後であらためて述べることにしたい。

4. 『神学大全』^{スレンマ} 翻訳者として最初に手がけた第13分冊「法について」は、その前半部分がかつて翻訳したことのあるものだったし、ハーバード・ロースクールでの一年間の法哲学研究、わが国の法哲学者たちとの法の本质や正義に関する共同研究などを通じて、新しい翻訳のための準備態勢が整っていたことが幸いして、容易に仕事を進めることができた。ところが、この時期、私は様々の理由から、哲学的には周辺の位置づけで片付けられがちな「習慣」^{かなめ} habitus 概念が単に心理学的にではなく、人間学や倫理学の全体にとっての要とも言うべき重要性を含む、と確信するに到った。さらに優れたトマス研究者・倫理学者である V. J. バーク教授の浩瀚なトマス・習慣^{ハビトゥス}哲学の研究書を読み、哲学的な「習慣」概念の歴史においてトマスが果たした重要な役割を知るに及んで、できれば彼が習慣・徳について論じている第11分冊を訳したいと考えた。偶々この分冊の翻訳は進捗していないことが判明したので、高田先生の承認を得て翻訳の準備に着手した次第である。

時を同じくして文部省から1年間の在外研究の機会を与えられ、ドイ

ツのボン、ミュンヘン大学に各々1学期滞在しつつ、スイス、イタリア、英国、フランスの卓越したトマス研究者たちと、文字通り膝を交えて教えを乞い、討論することができた。とくに有難かったのはスンマ・ドイツ語版と新しい英語版それぞれの総監修者であったパウルス・エンゲルハルト神父とトマス・ギルビー神父（共にドミニコ会員）と親しく長時間にわたって話し合い、スンマ翻訳が直面すべき課題、様々の困難な問題について教えて頂いたことである。エンゲルハルト神父とは中世の城のようなケルン郊外のアルベルトゥス・マグヌス・アカデミーの屋上にある隠修士風の住居で対談し、ギルビー神父とはまず近所のバブで挨拶を交した後、ブラックフライヤーズ修道院地下の、長年艦上生活をした神父好みの「鰻の寝床」のような部屋で意見を交換した楽しい思い出がある。

自ら希望した分冊ではあったが、当初から主題の1つである habitus の訳語をめぐって困惑した。第1部では「能力態」という訳語が採用されており、確かに habitus は生れながらの能力（可能態）potentia が現実態 actus へ向けて発達・完成させられた状態であるからこれはよく考案された新語 neologism と言える。しかし、私は習性、習態、性状、適性などの長所・利点をも考慮したが、最終的には容易に誤解を招く恐れ、強力な反対論を予測しつつ「習慣」という訳語を選択した。その理由については拙著『習慣の哲学』（創文社、昭和56年）第1章「習慣の概念」において詳しく述べたので、ここでは繰返さない。ただ、「習慣」が habitus の訳語として一般に受け入れられるか否かは、上記の著書における習慣論の歴史のおよび体系的研究が意味のある学問的寄与として認知・評価を受けるか否かにかかっているが、その点については私が言うことは何もない。

これと同様の問題は英語圏においても不可避免的に生じたのであって、米国の著名なトマス学者アントン・ペジス教授（当時フォーダム大学）が広く普及したランダム・ハウス社刊『トマス選集』2巻（1944）で habitus に habit の訳語を当てたのは容認することのできない誤訳ときめつけたのがカナダを代表するトマス学者、ラバル大学のシャルル・ド・コニク教授であった。この論争は見解の一致には到らなかったが、問題の所在を明らかにするには役立ったと言える。1964年にブラック

フライヤーズ版英訳スニマ第 22 巻を出版した旧知の A. ケニー博士は habitus に disposition, dispositio に state という訳語を当てているが、1977 年 2 月、当時オックスフォード、ペリオール・カレッジ学寮長^{マスター}だったケニー博士と数回、長時間にわたって討論した時は、これらの訳語には最早満足していない、もう一度訳することになったら別の訳語を工夫するだろう、と話してくれた。

翻訳の問題からはすこし離れるが、私がトマスの habitus 理解において極めて重要と考えている habitus と natura との関わりについてケニー博士と交した長い討論の最後に彼の口から出た言葉は私の記憶に深く刻まれている。「貴方は私よりもトマスに違和感がない comfortable with ようだ。私はトマスを読むとかなり多くの曖昧さや問題点に気付く、我慢できなくなる。だが貴方はあまり困惑しないで彼の用語や概念を使用しているように見える。しかし、もし貴方が広い公共の場で発言しようとするのなら、そうした用語で何を言いたいのか、もっと厳密に説明しなくてはならないでしょう。」私はこの批判は当時の私のトマス研究の問題点を適切に言い当てていると感じた。私は当時（そして今も）トマスの思想学説を決して完璧なものとは考えていなかったが、真の意味でのトマス批判は、トマス研究を更におし進めることを通じて私自身のパーソナルな哲学を形成した上で行うべきものだ、と考えていた。しかしケニー博士の目には、私のトマス研究は自ら哲学しないで、問題の解決をトマスに委ねてしまっている、と映ったとしても不思議ではなかったからである。

5. 第 11 分冊を昭和 55 年に出版した後、私は高田先生と出版社の指示に従って 2 年に一冊のペースで第 2 部の訳業を進めていたが、第 2 部冒頭の第 9 分冊「人間の目的と行為」は平成 5 年になってもまだ出版の目途がついていなかった。長年、高田先生の指導の下に訳を進めてこられた村上武子修道女（ドミニコ会）が前年に逝去された後も、高田先生は訳稿の彫琢を続ける姿勢を崩されなかったからである。出版がこれ以上停滞することに危機感を抱いた久保井社長の要請で平成 5 年 3 月 30 日、高田邸に大鹿一正、日下昭夫、川崎幸夫、森啓氏ら、高田研究室の関係者と私、それに創文社の久保井社長、編集部の小山光夫氏ら 7 名が集ま

り、先生を囲んで約3時間、第9分冊の速やかな出版と、今後の翻訳の進め方について話し合った。幸い、「もう少し猶予してくれるといいのだが」と繰り返された先生が、最後に「では、お言葉に従いますか……」と承諾され、私は辞去したのだが、この会議（高田先生の配慮で完全な議事録が残っている）は『神学大全』翻訳事業の一つの転機だったかもしれない。というのも、翌年、この巻の出版を見届けることなく高田先生は逝去され、その次の年には長年第3部の翻訳に取り組みつつ満を持しておられた山田先生の第25分冊「受肉」が出版されたからである。

山田先生は当初は（既述のように）キリスト論、秘跡論をふくむ第3部の全体を、読者の理解を助けるための詳細な「註解」ともいえる訳註を付して訳出する計画を立てておられたが、間もなく秘跡論はそちらで担当するよにとの先生の意向が伝えられた。さらに平成16年には、事故のため著しく健康を害された先生からキリスト論の残りも全部引き受けるよにとの依頼を受け、平成23年晩秋まで私の『神学大全』訳の日課は継続されることになった。その一年前、私も転倒事故で3箇月入院し、仕事に復帰できるか危惧したが、一月後には丁度「キリストの受難」にさしかかっていた翻訳の仕事を病室で再開することができた。おそらく日課としての翻訳に当てた時間が一番長かったのはこの入院中の日々ではなかったかと思う。

6. さきに『神学大全』翻訳の仕事から学んだ最大のこととして、「神学者」トマスの「思想を速記記号で表示したようなもの」と酷評されることもある語り方が、なによりもキリストへの愛に貫かれ、この愛に自らのすべてを献げつくす「キリスト信者・修道者」トマスの肉声として響いてくるように感じた、と記したが、これについては若干の補足と説明が必要であろう。まず誤解のないよう明らかにしなければならないのは、これはけっしてトマスの「神学」と「靈性」との分離を意味するのではない、ということである。より正確にいうと、この二つはともにトマスのうちに見出されるが別々のものだといえるのでもなければ、トマスは偉大な神学者・哲学者だったと言われるが、本当は「靈性の大家」*maître spirituel* だったといえるのでもない。そうではなく、『神学大全』

をそこに含まれている「項」の数だけの「解答」の集積として読むかぎり、この書物は明晰で一貫的だが「心の底から動かされる……非常な深さとか高さ」は感じられないかもしれない。だがそれを一冊の書物として著者の意図を汲み取りながら読むことに努める読者には神学と霊性とが一体化していることが感じとられ、それが実はトマス神学の根本的特徴であることを理解できるのではないか、ということである。

同じことを言いかえると、トマスの「主知主義」と言われるもの、行き過ぎとも思えるほどの神学的探究の徹底性の根底にあるのは、信仰を通じてわれわれに親しく現存する神への愛であり、その意味での「神秘主義」だ、ということである。トマスにおいて神学的探究のすべては「神を見る」という人間の究極目的（至福）へ向けて営まれているのであるが、神を見ることへ向けてわれわれの心を燃え上らせるのは神への愛である（S. T., II-II, 180, 1），とトマス自身が言明している。それだけではなく「より多くの愛 caritas を有する者はより完全に神を見るであろう。そしてより至福であるだろう」（S. T., I, 12, 6）という、主知主義者の唇には上りそうにない言葉を記しているのである。この場合、「主知主義」と「神秘主義」のいずれもそれだけではトマスの神学的探究の特徴を適切に言い表わすことができないのは明白であるが、問題は一見、相互に極度の緊張関係のうちにあるかに見えるこれら二つの要素が統合され、一体となることを可能にしたものは何であったのかであろう。

次に述べるのはあくまで一つの假説に過ぎないが、『神学大全』翻訳を通じて私に見えるようになった解答は、トマスは一貫して「知解を求める信仰」 fides quaerens intellectum という神学的探究の本質に忠実であった、という或る意味で単純極まることがそれを可能にした、というものであった。信仰が知解を求めるということは、信仰はあくまで信仰であり続けつつ知解を求めるということであって、信仰が自らを知識へと変容させる se transformans のでもなければ、知識へと移行する transiens のでもない。そうではなく、信仰はまさしく自らを信仰として完成するために知解を求めるとあって、知解が進むのに応じて信仰が後退したり、無用になるのではない。ところで、トマスによると完全な信仰とは徳であるから（S. T., II-II, 4, 5），知解によって信仰が完成されるとは、信仰が徳として完成されるということであり、それは信仰の

形相 *forma* (S. T., II-II, 4, 3) であって、それなしには信仰は本来的に言って *proprie loquendo* 徳ではありえないとされる愛 (徳) (S. T., I-II, 65, 4) *caritas* がより大いなるものとなることであった。つまり、信仰が知解を求めるのは、そのことによって愛がより大いなるものとなり、神とより親しく結びつくためだ、というのが「知解を求める信仰」についてのトマスの理解であった。したがって、トマスの場合、神学的探究の徹底的な遂行は、それが信仰を「徳」として完成するものであったかぎり、彼の「神秘主義」ないし「靈性」といささかも衝突したり、それを弱めたりすることはなく、むしろそれを深めるものだったのである。

7. さらにトマスが信仰の「神秘主義」を深めるような仕方では彼の神学的な知的探究を徹底的に進めることができたのは、彼の場合、神学・聖なる教え *Sacra Doctrina* が (神の言葉としての) 聖書 *Sacra Scriptura* と単に言葉としてだけでなく、その内実においても完全に合致していたことによる、とすることができる。トマスにとって神学的探究とは、神について何か新しい論証を考案することではなく、教える神 *Deus Docens* に完全に自らを従属させ、その言葉に耳を傾け、そこにふくまれている意味をできるかぎり完全に理解しようとする試みにほかならなかった。そして、その試みはそのまま聖書を信仰をもって神の言葉として受け入れ、その教えに従って生きる——それはトマスにとって、自己を「全焼のいけにえ」として献げつくす修道者 *religiosus* としての生であった——ことにつながったのである。言いかえると、トマスの場合、信仰が^{おの}自ずから求めてやまない知解をめざして知的探究を徹底的に進めることは、聖書の教えを全面的に受け入れ、信仰者として、修道者として生きる彼の生そのものだったのであり、それが彼の神学の根本的特徴であった、というのが『神学大全』^{ス・マ}翻訳を通じて私が学びとった「トマス神学」についての理解である。

8. さきにトマス研究は (それが学術的研究であろうとする限り) トマスが明晰な言葉で語った事柄を正確かつ批判的に理解することに徹すべきで、曖昧さや多義性を免れることの困難な「神秘」に踏みこむべきではない、という考え方に触れたが、そのことに関して一言しておきたい。

実を言うと、『神学大全』の文章は明瞭で判り易いが、そこで語られていることは屢々逆説的あるいは自己矛盾的と呼びたい内容であり、また論理的飛躍としか言いようのない論の進め方も少くない。典型的な例を一つ挙げると、彼によると「祈り」は本質的にわれわれが必要とするものを神に願い求める「請い求め」petitioである。完全な自己放棄の誓願を立てた修道者が「現世利益」を説くのは可笑しいなど思っていると、請い求めこそ神が最も嘉よみされるいけにえ「打ち砕かれた霊」なのだ、という思いがけない結論が続く。ここで途方に暮れていると、切なる請い求めは自らが神なしでは虚無であることの告白であるかぎり、自己を完全に神に従属させることにほかならず、それは神への最もふさわしい献げものなのだ、という説明が続いて、トマスが考えている「祈り」の輪郭がほのかに見えてくる。しかしこれはまだ序の口であって、トマスの真意を理解するためには、人間が神へと自己を完全に従属させることがそのまま人間の自己実現の完全な遂行であり、真の自由である、という彼の「人間」理解、そしてその根底にある「神がわれわれの救いのために人間となった」という「信仰のみによって」sola fide肯定される受肉の神秘へと探究を進めなければならない、というのがさきに提起した問題についての私の考えである。